1 盛美園

清藤家24代盛美が小幡亭樹匠宗を招き、明治35年から9カ年を費やして作庭した面積1.2ha池泉回遊式の大石武学流を代表する名園で、国名勝に指定されています。京都の無隣庵、清風荘とともに明治の三名園の一つに数えられています。一角にある盛美館は一階が純和風、2階が洋風の和洋折衷の珍しい建物で、庭園と融合した独特の美しさがあります。

2 清藤氏書院庭園

清藤家の記録によると、寛永年代(1624～1643)に花山院忠長が唐糸御前の悲話を聞き、弔う意味を込めてケヤキを中心に庭を造ったとされます。その後元禄期(1688～1703)に京都の茶人、野本道玄が手を加えたとされています。また、この庭園は津軽地方でよくみられる「大石武学流」の源流であるとされており、母屋とともに国名勝に指定されています。

3 猿賀神社

蝦夷征伐のため北上した坂上田村麿が「神蛇宮」として建立したと伝えられる神社で、本殿は県重宝に指定されています。藩政時代に入り、津軽為信公により祈願所として定められ、農漁業、交通、眼の守護神として尊信されています。

七日堂祭や十五夜大祭など一年を通じてさまざまな祭事が行われています。また、7月から8月にかけて鏡ヶ池に淡いピンクの花を咲かせる蓮は、北限の「和蓮」とされており一面に咲き誇ります。

【獅子踊り】 古来より五穀豊穣・祖霊崇拝・悪疫退散等を目的に伝承されてきた民俗芸能で、平川市内には9組の獅子踊が伝えられています。毎年旧暦の8月15日には、猿賀神社境内にて「猿賀神社大祭奉納県下獅子踊大会」が開催され、笛、太鼓、鉦の囃子にあわせた勇壮な踊りを披露しています。

4 沖館神明宮

歴史のある神社で、江戸時代以前に遡るといわれています。明治以前には、学校も併設されていたと伝えられています。また、境内には、津軽三十三観音の29番目の札所となっている十一面観音堂があります。

【菩薩坐像】 美濃国の僧、円空の作。背面には「奉寄進観音一仏　貴峯山月峯住寺六世　的心益伝代　津軽沖館村　干時寛文拾庚戌※季三月十七日」とあり、台座裏には梵字を墨書しています。

1本の素木から作造したもので、津軽地方で見られる円空仏と様式的にもほぼ同時期のものです。(※1670年)

5 広船神社

津軽三十三観音第28番札所で、坂上田村麻呂の千手観音像をまつる。「正長2(1429)年」銘の鰐口がある。

【県重宝　鰐口】時期＜室町時代中期＞　この鰐口の銘にある金森山は、旧広船村西部にあり、ここに広船寺があったという伝承はあるが、この銘文を裏付ける文献は発見されていない。しかし、500年以上前の金属器に鋳刻された金石文にこれをとどめていることは、時代考証の上からも貴重である。

6 八幡崎遺跡

縄文時代晩期の低湿地・泥炭層遺跡。昭和44年県史跡の指定を受けている。旧尾上町の中心部から延びる低台地西端に位置し、遺跡上には八幡宮が鎮座している。遺跡は上層に奈良時代の集落があり、台地の北側低地に縄文時代晩期の遺物包含層がある。

7 新屋八幡宮

浪岡北畠氏が3ヵ所に勧請した八幡宮の1社で、1642(寛永19)年に弘前藩3代藩主津軽信義が祈願所とした。神社西方の集落一帯が、七戸南部氏の支族新屋氏の新屋城跡である。

8 七柱神社

「御由緒調」によると、建立されたのは延暦12年(793)にさかのぼると記録されています。また境内には、推定樹齢350年のケヤキの巨木が4本あり、大きいものは幹周り6.3m、樹高26mを誇り、「日本一のケヤキの森」といわれています。

9 平川市郷土資料館

【土偶】 唐竹地区堀合遺跡から出土したもので、昭和48年に教育委員会に寄贈されました。丸い目と口の表情、自立し両腕を拡げ、胸を張っているようにもみえる造形をしています。2009年9月から11月まで、大英博物館で展示されました。

10 保食神社(大光寺慈照閣)

大光寺慈照閣の創建は為信の津軽統一後のことになる。慶長8年(1603)、大光寺城主・津軽建広の妻・富姫(為信の娘)が若くして病没し、この菩提のため為信は三重塔を建立し、建長11年(1606)には建広が観音堂と慈照閣を建立した。寛永7年(1630)、落雷のため三重塔は焼失する。明治の神仏分離で保神社となる。津軽33観音の30番目札所となっており、大光寺城跡の石碑や文政6年(1823)に建立した四国三十三ヵ所巡りの碑がある。

11 大光寺城跡

新城、古館、小館、五日市館からなる。新城の城域は、主郭・北の郭・南の郭・袖郭の四郭からなっている。新城は、発掘調査により11世紀に築城された事が判明した。南部氏に支配が移ってからは滝本播磨守重行など数次にわたり城主の交替があった。廃城は、慶長14(1609)年津軽左馬之介建広が城主のときとされる。当時の遺構はないが、弘前城北の郭北門(亀甲門)は大光寺城の追手門を移築したものであり、往時の偉容が偲ばれる。

12 原遺跡

遺跡地内には「狐盛」と称される直径約6m、高さ約1.5mの土盛り塚が存在しています。ここは奈良～平安時代(8世紀後半～9世紀前半)の墳墓と推測される末期古墳や竪穴住居跡なども発見されており、狐盛を含めた周囲一帯は津軽地方では珍しい、古墳群跡(原遺跡)といわれています。

13 農家蔵郡

尾上地域には、蔵(土蔵)と庭園が多くありますが、特に金屋地区に群立しており、周囲の手入れされた庭や生垣と調和して美しい農村景観を形成しています。これらの大半は、明治以降昭和中期までに建てられた農家所有のもので、一部が国登録有形文化財に指定されています。規模やその変遷は不明であるが、津軽為信の実父という武田甚三郎守信の居城となり、さらに為信が領知することになったという。天正18年(1590)、津軽の独立を果たした為信は、文禄3年(1594)本拠を大浦城から堀越城に移し、あわせて家中諸士、神社仏閣、商家なども堀越へ移住させた。これは、政治及び経済面での領内支配強化のためといわれる。しかし、家臣の反乱で本丸が陥落するなど、軍事面からみると堅固な城ではなかったようである。